龍樹の仏教観

サンプル版
Sample

楠龍造

明治の若き学僧による龍樹入門
完全復刻

「仏教史上最大の論師」
「第二のブッダ」
「八宗の祖」
中観派の開祖
龍樹（ナーガールジュナ）の深遠にして難解極まる「空」の思想の全貌を概説！

「南天大乗仏教の創唱者、偉人龍樹の仏教史上の地位を論定せんと欲するなり」
（本文より）

この電子書籍は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

凡例

一、本書の底本には、楠龍造『龍樹の佛教觀』（明治三十三年九月、爲法舘刊行）を用いた。

一、経典の引用に際し、底本にはない読み下し文を付した。読み下し文は基本的に公刊文献から引用したが、公刊文献に読み下し文が見当たらない場合、独自に読み下し文を作成した場合がある。また一部、現代語訳を付した。読み下し、現代語訳いずれも典拠する原文の表記に応じて、元となる引用文と多少の違いがある場合がある。

一、引用文は、引用元から直接引いており、底本と表記に相違がある場合、引用元に準拠している。引用文直後の引用元記載は編者による。

一、原文に註はなく、註はすべて編者によるものである。

一、〔　〕（亀甲括弧）内は編者による補足や簡易な註記である。ただし、引用文の原文中に〔　〕がある場合はその旨を記載し、また同時に編者註がある場合は［　］（角括弧）を用

い、その旨を記載した。＊印も編者による註記である。

一、閲読の便のため、底本に対し、次のような整理を加えた。

1. 旧字・旧仮名遣いを新字・新仮名遣いに改めた。旧字ではないが、現行通用の表記に改めた場合もある。ただし引用文はこの限りになく、断りない限り、引用文の原文に準拠している。経典からの引用も同様。ただし、ＪＩＳの漢字コード体系外の文字については、新字にて代替した。踊り字、合略仮名は現行通用の表記に改めた。

2. 漢字表記のうち、代名詞、副詞、接続詞などを一部ひらがなに改めた。これ以外にも、編者の判断で一部の漢字表記をひらがな表記に、またひらがな表記を漢字表記に改めた。

3. 送り仮名は現行通用のものに倣い、適宜付加ないし削除してある。

4. 原文にルビ、振り仮名はないが、難読や誤解の恐れがあると思われる漢字に振り仮名を付した。またルビの中には振り仮名ではなく、漢名に対し、サンスクリット名を付した場合もある。

5. 句読点、中黒、〈 〉（山括弧）を適宜追加。書名・雑誌名には『 』（二重かぎ括弧）を追加。経典については、註記や引用文中に用いられている以外は、底本に倣って追加していない（底本で異部宗輪論にのみ付された「 」は削除）。またカタカナ表記の人名、地名などに付された「 」（かぎ括弧）を削除。

6. 底本で欄外に記される小見出しを本文に組み込んだ。このために原文に倣わず、独自に改行した箇所もある。

7. 引用文中の斜線／は原文改行を意味し、傍点は原文のままであるが、振り仮名はこの限りでない。

8. 明らかな誤記、誤植は訂正した。

一、龍樹撰述の経典については、以下の文献より読み下し文を引用した。

中論

『新国訳大蔵経[インド撰述部]【中観部】16-1 中論　上』（大蔵出版）
『新国訳大蔵経[インド撰述部]【中観部】16-2 中論　下』（大蔵出版）

大智度論

『国訳大蔵経　論部　第1巻』（国民文庫刊行会）
『国訳大蔵経　論部　第2巻』（国民文庫刊行会）
『国訳大蔵経　論部　第3巻』（国民文庫刊行会）
『国訳大蔵経　論部　第4巻』（国民文庫刊行会）

十住毘婆沙論

『新国訳大蔵経［インド撰述部］【釈経論部】14-12　十住毘婆沙論 I』（大蔵出版）
『新国訳大蔵経［インド撰述部］【釈経論部】14-13　十住毘婆沙論 II』（大蔵出版）

十二門論

『国訳大蔵経　論部　第5巻』（国民文庫刊行会）

菩提資糧論

『国訳一切経　印度撰述部　論集部　第5巻』（大東出版社）

序

〔吉田賢龍による序文〕

近来東洋学、殊に仏教学に関する講究はますます盛大に赴き、東西の諸大学争いてこれが講座を設くるに至れり。しかれども泰西の学者が探究の材料は多くは小乗仏教[1]にあるが故にこの方面においては研尋すこぶるとどき、著述また鮮やかなからずといえども、大乗仏教に関しては彼らの通達し得る資料に乏しきがため、未だ眼光をここに注ぐ能わず。これ故に大乗仏教はあたかも茫々たる原野のごとく全く開拓せられずして委棄〔遺棄〕しあるなり。この時に当たりて豊富なる資料を専有せる東洋学者はまさに発奮興起、以て大乗仏教の真相を発揮し世界の学術宗教の進運に貢献すべきにあらずや。殊に仏学の覇権を握れる真宗大学〔大谷大学の前身〕はよろしくこの大任務を自覚すべきにあらずや。

大乗仏教の歴史中最も重要にしてかつ興味深きは聖龍樹の研究にあるべし。大乗の興隆者として龍樹のさきに馬鳴ありといえども、小乗に対する大乗の歴史的意義を観察し、かつ後世における大乗諸派の発達の源泉を探らんには龍樹の方、遥かに緊要なり。しかるに従来の

仏教学者いたずらに倶舎に三年を費し、唯識に八年を消し、はた眇たる起信論に汲々たるのみに、彼の重大なる題目を措いて顧みざりしがごときは遺憾の至りなり。

畏友楠龍造君、かねてより龍樹について専心究むるところありし頃日、その学び得たるところを草し、まさかに梓に上さんとす。余、その稿本を一覧したるのみ、未だ熟読の栄を得ずといえども、それ現今学界の需要を充たし、かつ真宗大学の諸賢をして続々その組織的研究の結果を発せしむるの端緒を開きたる功労は没すべからざるを信じ、あえて一言を寄す。

明治庚子仲夏[2]　　東都僑寓[3]にて　　吉田賢龍[4]

---

1 **小乗仏教**　部派仏教（アビダルマ仏教）に対する大乗仏教からの貶称。このため本書では、底本で使用されている場合や術語的な用法である場合を除いてこの呼称を用いず、部派仏教と呼ぶ。

2 **明治庚子仲夏**　明治庚子は明治三十三年、仲夏は夏の半ば、陰暦五月。

3 **東都僑寓**　東都は京都に対する東の都、東京のこと、僑寓は仮の住まい。

4 **吉田賢龍**　一八七〇～一九四三。東京真宗中学校長や広島高等師範学校校長、旧制広島文理科大学の初代学長などを歴任した教育者。楠龍造と同じく清沢満之（きよざわまんし）の弟子であり、清沢とともに、真宗大学創立に際し、建築掛に任命された。著作に『内的生命観』、『釈迦史伝』（共著）などがある。

序言

仏教は世界の一大宗教なり。仏教の発達開展は、東亜人類思想の発達開展を意味す。しからばすなわち、仏教を摯実に研究するは東亜人類思想の発達開展を研究するものにして、こは独り宗教家のみの責任にあらずして、また学者たるものの職分ならずや。近来、我が日本をはじめとして独に英に仏に、仏教を公平に研究するもの、ようやく多きを加うるは、斯道のため喜ぶべき現象というべし。吾人〔わたし〕は仏教家なりといえども、我田引水の僻論は大いに排斥するところ、つとめて公平無私にこれを研究せんと欲するものなり。これを研究するに種々の方面と方法ありといえども、吾人は仏教史上大家の著書を取り、これを精密に研究咀嚼し、その人物の性行、思想、思想の変遷等を明白にせんことを勉む。しかしてまず一番手として龍樹を捉住せり。本書は昨年より今日まで研究せし一部分なり。さらに他日を期して続編を出さんことを思う。もし龍樹の研究にしてその功を終らば、歩武を進めて無着、世親、堅慧、陳那、護法、安慧、清弁、戒賢、智光等に移らん。ただ恐る浅学寡聞、志ありて力なく、気満ちて力足らざることを。しかれどもあえて本書を公にするところ

のもの、一つは仏教研究にある同人諸兄の是正を乞い、一つは我が疎漫なる研究といえども、暗夜における一、二点の星光、なお行人（ぎょうにん）の一助となるごとく、微少なりとも思想界に貢献せんことを望めばなり。就学者の精神またここに外（ほか）ならざるべきを信ずればなり。

本書はかつて『無尽灯』[5]、『仏教』[6]に載せたる論文その半を占む。しかしてこれを輯成（しゅうせい）〔集成〕したる後、村上文学博士[7]の一瞥を乞い、その注意により「『空』論と密教および他力教の関係」の一章を加入し、外に一、二個所を訂正せり。なお敬友、草間仁応[8]、吉田賢龍二兄は、吾人の事業について多くの助言と助力を与えられたり。ここに三君に対して感謝の意を表す。

明治三十三年八月京都の客舎にて　　楠　龍造　誌（しるす）

5 **『無尽灯』**　真宗大学寮などの有志によって一八九五年（明治二十八年）に創刊された仏教学の研究誌。本書の著者・楠龍造も編集に携わっていた。

6 **『仏教』**　古河老川、境野黄洋、高嶋米峰らによって結成された経緯会（後の仏教清徒同志会へと繋がる）の機関誌。

7 **村上文学博士**　村上専精（せんしょう）（一八五一～一九二九）のことか。真宗大谷派の僧。仏教学者。大谷大学学長。楠龍造の師・清沢満之らとともに宗門の改革運動に参加。仏教の歴史的研究を提唱。『仏教統一論』の記述が大乗非仏論だと非難され、一時僧籍を剥奪された。その他の著作に『日本仏教一貫論』、『真宗全史』など。

8 **草間仁応**　関根仁応ともいう。楠龍造と同じく清沢満之の門下生。「清沢満之の懐刀」と呼ばれた。一八六六～一九四三。

龍樹の仏教観

目　次

第一章　インド仏教史上における龍樹の地位

インドの地勢と天職――インドの最大産物――インド宗教界の大勢――大乗仏教の萌芽――馬鳴・龍樹の比較――龍樹以後仏教界の大勢

第二章　「空」「有」二潮流の根本的差異

実在論と観念論――「有」「空」の二思潮――「空」思潮の代表――「有」思潮の代表――「空」「有」二思潮の比較

第三章　龍樹の性行

龍樹の第一期――龍樹の第二期――龍樹の第三期

第四章　無宇宙論の基礎

哲学と宗教の融合――人世観即世界観――「無宇宙論」の論理的過程――疑問――四個の原則――諸法は如何にして生ずるか――諸法に自性なし――結果は因縁の中にあらず――四縁あることなし

第五章　業感縁起と空論の関係：

インド思潮の特色――業感縁起と「空」論の関係

第六章　「空」論と密教および他力教の関係

「空」とは何ぞや――釈摩訶衍論に対する伝教の七難――同三船居士の四難――菩提心論観察――

智度論にあらわれたる密教的思想――密教と他力教の関係――他力教と「空」の関係

第七章　龍樹の他力教

インドにおける他力教の福音――他力教の萌芽――他力教の顕現――易行品にあらわれたる他力教――智度論にあらわれたる弥陀仏国

第八章　八不の意義

八不の意義――四諦と八不の関係――懐疑論か先天直覚論か――戯論の種類

第九章　真俗二諦《上下》

「空」論と常識――真俗二諦の建設――「有」の二様の意義――荘厳の説および批評――開善の説および批評――龍光の説および批評――吉蔵の説および批評

第十章　龍樹の大小乗区別

中論の大小乗区別――智度論の大小乗区別の一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一

第十一章　経典の分類

仏教典の一瞥――経典の科学的分類――智度論に引用せられたる経名――龍樹の経典分類――龍樹の大乗仏説の意見

第十二章　龍樹の神通論

神通研究の必要――龍樹の神通に対する意見

第十三章　龍樹の涅槃論

涅槃は存在にあらず――涅槃は虚無にあらず――涅槃は存在と虚無の合併にあらず――涅槃は非存在と非虚無にあらず――涅槃の真意義

第十四章 龍樹の仏陀論

法と人――仏教は無神教にあらず――仏身に二種あり

第十五章 修行の過程

因位の修行――十地の階級――品数階級無意義にあらず――六度

龍樹の仏教観

第一章　インド仏教史上龍樹の地位

楠　龍造　著

インドの地勢と天職

茫々たる亜細亜の南部、三大半島の海中に突出するあり。その中間に位するものをインドとなす。これを形容すれば、あたかも首の両側に手を広げ、南方に進まんとする動物のごとし。インドはまさしくその首の部分たるなり。インドは波斯、埃及、アッシリア、バビロニア、猶太等のごとき、古代文明先進国の随一にして、世界の文運に貢献したるもの、あえて尠少にあらざるなり。たとえ今日英国の配下に属し、いともあわれはかなき状態に沈淪し、岩石の下に生長せし野草の、さらに生色なきがごとくなれども、天より命ぜられたる国家的職能は、すでに二千余年以前に、これを尽せしなり。吾人はこの大恩人の老後薄運の境遇にあるをみ、同情悲痛の感に打たれずんばあらず。欧州人は一同に希臘文明を感謝すると同じく、亜細亜人はその日本人たると支那・朝鮮人たるとに論なく、インド文明に負うところす

こぶる大なるを感謝せざるべからざるなり。嗚呼、彼は国家としての職能を尽せるなり。世界の文明に幾多の寄与をなしたり。人類の生存せん限り不朽の運命を有せり。インドの国土は滅亡する時機あるも、インドの思想は終古（しゅうこ）、滅せざるなり。

インドの最大産物

その世界の文明に貢献したるもの、あえて尠少にあらずといえども、西洋紀元前六世紀の末に起こりたる、釈迦仏の仏教のごとき、広大深遠なる影響を、世界に及ぼせるものはあらざるなり。見よ、仏教は東方、緬甸（ビルマ）、暹羅（シャム）〔タイの旧称〕、安南（アンナン）〔ベトナムの旧称〕、西蔵（せいぞう）〔チベットの旧称〕、蒙古、支那、朝鮮、日本に伝播し、大いにその勢力を逞（たくま）しうし、東南における爪哇（ジャワ）〔ジャワ島〕、南方における錫蘭（セイロン）〔スリランカの旧称〕、皆、風化を蒙れり、西方においては亜剌比亜（アラビア）のごとき、希臘（ギリシャ）のごとき、皆そが影響を受けたり。これに依りてこれをいえば、インドの世界に寄与せし、最も偉大なる産物は、金銀宝玉にあらずして、救世解脱の使命なる、仏教なることを忘却すべからざるなり。

インド宗教界の大勢

救世の使者、解脱の導師、釈迦仏、涅槃の雲に隠れしより、一千余年間、インドにおける仏教の運命、一盛一衰、一起一仆、海潮のごときものありしとはいえ、その間の仏教史を繙いてこれを一瞥せんか。幾多の偉人豪傑輩出し、深遠なる思索は六合の外に徹し、偉烈なる活動は四海にひびき、光彩陸離、龍飛虎躍、誠に千歳の偉観たり。吾人は今そが中において、最も多方面なる最も思索に富める、仏滅七百年紀元二世紀の南天大乗仏教の創唱者、偉人龍樹（Nāgārjuna）の仏教史上の地位を論定せんと欲するなり。

仏教を去ること極めて遠く、既にアーリアン（Āryan）南下時代において、吠陀（Veda）の神話あり。そのようやく考察の深遠に進むや、優婆尼沙土（Upaniṣad）の哲学となり、さらに一転して婆羅門教（Brahmanism）となり、その婆羅門教のようやく腐敗溷濁するや、いたずらに四姓[9]を峻別して暴横をきわめ、人智の発達を害し、社会の活動を塞ぎ、その弊毒、甚だしきものあるにあたり、一般衆生[10]の渇望に応じ、世界の要求に対し、一大偉人出現せざるべからざる時機に迫りたり。しかり偉人は出現せり。紀元前六世紀の末、中天竺迦比羅城（Central India Kapilavastu）の一園、無憂樹、花鮮やかに、異禽〔珍しい鳥〕、枝より

枝に歌う藍毘尼（Lambini）に、大千を照らす一大光明かがやけり。これすなわち仏教の教主・釈迦仏の降誕なりとす。世尊〔釈迦の尊称〕は浄飯王（Śuddhodana）の子なれば、権勢と富貴とその他浮世のあらゆる栄華において、少しだも欠乏するところなかりし、されど深沈多感なる彼は、生老病死を見て世の無常をさとり、火山の巓に歌舞するの愚を学ぶ能わず。大平を歌う白霜の前の蟋蟀たる能わず。一夜窃かに王宮を脱し、年来育養の大恩ある父を棄てて、愛々たる妻を棄て、富貴を棄て、権勢を棄て、あらゆる浮世の快楽を棄てて、生老病死に動せられず、憂喜苦楽に乱されざる、無上正真道を発見せんとつとめたり。幾多の悲風惨雨に浴し、苦痛煩悶の後、畢波羅（Pippala）[11]樹下に端坐し、深妙禅に入り、一朝東方明星上るとき、洞然として正覚をひらきたまえり。この時三十歳[12]、これより以後およそ五十年、あるは鹿野園（Mṛgadāva）[13]、あるは王舎城（Rājagṛha）[14]、あるは象頭山（Gayāśīrṣa）[15]の上に、あるは拘尸那掲羅（Kuśinagara）[16]の茂林に、至るところ法輪を転し[17]、四諦八聖道[18]の福音を以て衆生を教化せり。仏教の源泉ここにあり。インドの光明ここにあり。二千余年の今日に伝わり、幾百万の玄言を支配するものここにあり。仏滅後、遺法結集の必要を感じ、迦葉（Kāśyapa）[19]、摩揭陀国（Magadha）の王阿闍世

（Ajātaśatru）に説き、王舎城畔の十八大寺を補修し、ならびに竹林精舎の西南、昆波羅山（Vaibhāra）の七葉窟（Sapta-parna-guhā）[20]に一大精舎を立てしめ、前者を以て主なる僧衆の集合所となし、後者を以て聖典結集の場所となしたり。迦葉は論部に、優波離（Upāli）は律部に、阿難陀（Ānanda）は経部に首座として三蔵を結集せり[21]。しかるにこの時に当たり、窟中に入りて三蔵結集に与り能わざる羅漢[22]、なお多く、彼らは窟外に集合して別に三蔵を結集せりという。上座部（Sthavira-vāda[23]）、大衆部（Mahāsaṃghika）は早く、すでにこの時に根源せるならん。北方所伝によれば、文珠（Mañjuśrī）、弥勒（Maitreya）等の大菩薩、この結集以外にさらに大鉄囲山[24]に集合し、大乗三蔵を結集せることを伝う。その後多少の変化開展ありしならんも、甚だしき分裂を見ずして、二百年を経過せり。ここに仏教界に大影響を及ぼせる阿育王（Aśoka）あらわれ、一朝自己暴虐の過失を悔い、深く仏教に帰し、八万四千[25]の寺塔を建て、伝道師を諸国に派遣し、また十数回の勅令を発し、これを岩石に彫刻し、各国に建設し、仏教倫理を社会に実行せしむるの方針をとれり。その仏教に及ぼせる効は、コンスタンチン（Constantine）帝[26]の耶蘇教〔キリスト教〕におけるがごとし。阿育王の死後、種々に分派し、互いにその義を固守し、一歩も譲らず。世友尊者（Vasumitra）

[27]の異部宗輪論には二十部をのせたり。その根源は上座部・大衆部の軋轢に基づく。上座部は保守にして戒律儀式を重んじ、行動は着実なれども、その教理は当時の思想界を満足せしむる能わざるもののありしがごとし。大衆部は進歩派にして、深遠なる教理を唱道し、大胆なる行動をなせるもののごとし。しかりしこうして仏滅二百年より五百年前後まで、宗派種々に分裂し、上座部は説一切有部、雪山部、犢子部、法上部、賢冑部、正量部、密林山部、化地部、法蔵部、飲光部、経量部の十一部となり、大衆部は一説部、説出世部、鶏胤部、多聞部、説仮部、制多山部、西山住部、北山住部の九部となり、小乗の教義大いに発達し、大乗仏教開展の先駆となり、礎石となり、予備となりしもの少なからず。

大乗仏教の萌芽

この中、大衆部中、一説部の世出世[28]の法、皆、実体なくして同一仮名なりといい、説仮部の世出世の法、通して仮名なりということ、これ真実なりと説くがごとき、仏陀の周遍円満[29]、無碍自在[30]なるを説くがごとき、般若皆空論の思潮に、摂属〔包摂〕せしむるを得べきものにして、後世龍樹「不可得空論」の先駆たるなからんや。大乗教理の萌芽大衆部にあ

らわれたるは、教理史上掩(おお)うべからざる事実なり。豈忽然として大乗なるもの思想界にあらわるるを得んや。後、仏滅およそ六百年（西洋紀元後十年頃）、中央亜細亜より南侵し来りたるサーカ（Saka）種より出でたる、迦尼色迦(カニシカ)王（Kaniṣka）[31]厚く仏法を尊崇し、中インドとの接戦に、戦勝の報償として馬鳴（Aśvaghoṣa）[32]を得、その言を用い、教法流布に大いに力を尽くせり。当時インドの北方、迦濕彌羅(カシミール)（Kashmir）は、一切有部の根拠地となり、摩訶陀(マガダ)は大衆部強盛を極め、互いに弁難攻撃を事とせり。しかるに説一切有部は迦尼色迦王に説き、宗義統一のため仏典結集をすすめ、北方の国都ジャーダラ（Jālandhara）[33]に、五百の大阿羅漢を会し、脅尊者(きょうそんしゃ)（Pārśva）[34]を上首とし、毘婆沙論(びばしゃろん)[35]を結集せり。大乗仏教の創唱者、馬鳴またこの結集に参せしという。馬鳴は英俊卓識の人、浅近なる説一切有部の教義に満足する人にあらず。果然彼は有部の雑然たる多元的教義を棄て、一心二門の汎神的教義を唱導せり。その教義上より察すれば、僧佉(そうぎゃ)（Sāṃkhya）[36]に影響せられたるものあるを知るべし。これ北方仏教の一大変化なり。しかれどもその積極的肯定的にして、「有」の性質を有するは、始終、北方仏教の特質なりというべし。その後、およそ一百年を隔て、南インド憍薩羅(コーサラ)（Kosala）[37]において曠世の偉人龍樹あらわれたり。龍樹は幼より、聡明奇悟、早く学術技

芸の堂奥を窺い、青年のとき一度罪悪の深淵に溺没せるも、いったん自己の過失をさとるや、翻然として仏門に帰し、小乗三蔵を以て足らずとなし、諸国を周遊して道を求め、雪山〔ヒマラヤ〕において一老比丘[38]より摩訶衍[39]の経典を授かり、なお種々の宗教学術をきわめ、その結果「般若無所得空論」を主張し、法界[40]の真相は、有とも名づくべからず、無とも名づくべからず、非有非無〔有でも無でもない〕とも名づくべからず、亦有亦空〔有でもあり無でもある〕とも名づくべからず、空無所得[41]のものとなし、この真位に安住して世間の憂喜苦楽に動揺せられず、世間即涅槃に体達せよとすすむ。提婆[42]、龍智[43]、この思想を受けて布演〔敷衍〕し、「空」論は以て一時代の思潮たるに至れり。北方には馬鳴の大乗仏教あり。南方には龍樹の大乗仏教新起し、インド仏教今やその高潮に達せんとする時となれり。龍樹は馬鳴および、その教義を知りしや否やは一つの疑問なり。龍樹の著書をよむも少しもその事実を認むべきものあらず。

馬鳴・龍樹の比較

試みに二者を対照比論せんに、

一、馬鳴は時間上より縁起論を唱道し、大いにこれに重きを置きたり。龍樹は空間上より実相論を主張し、そが皆空論をもって唯一の立脚点とせん。

二、馬鳴は仏陀に法報応の三身あることを説き、仏身論の見解、その完美を尽くせり。龍樹は仏身に関しては、法性身・肉生身を説くのみなり。

三、馬鳴は眼耳鼻舌身意、六識の外に、起信論の「所謂不生不滅與生滅和合非一非異名爲阿頼耶識」〔いわゆる不生不滅と生滅、和合して一にあらず、異にあらず、名づけて阿頼耶識となす〕というたる、阿頼耶識[44]を立て、後世、世親の頼耶縁起論[45]の暗指をなせり。龍樹は六識を説くのみなり。

四、馬鳴は一心の法を根本として心真如門と心生滅門を顕示せり。龍樹は真俗二諦を説けり。

五、馬鳴は論旨肯定的なれども、龍樹は論旨否定的なり。

六、馬鳴の教義は汎神論的なれども、龍樹の教義は無宇宙論的なり。

かくのごとく二者の間に相違ありしにかかわらず、従来の仏教小乗各宗派をもって、浅近浅薄なりとてこれを斥け、釈迦仏は声聞浅機[46]のために、摩訶衍を説かず。もしこれを説くも了解せざりし。ただ大機利根[47]のもののために、摩訶衍を説けり。自己の主張せる仏教は大乗摩訶衍なりとするに至りては、馬鳴、龍樹ともに同一なり。人あるいは釈摩訶衍論[48]と菩提心論[49]をもって、龍樹の馬鳴より影響を受けたることを証すといえども、釈摩訶衍論は、朝鮮の人、月忠の偽作というもの、真に近く、伝教〔最澄〕の七難、よくその肯綮に当たれり[50]。菩提心論は不空三蔵の作というもの真に近し。後にこれを述ぶべし。この二書を外にして、龍樹の馬鳴より影響を受けしを知るべきもの、一つもあらざるなり。吾人は馬鳴、龍樹の二人を以て、大乗仏教の二方面を代表する者と信ずるなり。

龍樹以後の仏教界の大勢

次に眼光を転じて、龍樹以後の仏教を観察するに、龍樹の後、およそ二百年を隔てて、中インドに無著（Asaṅga）[51]、世親（Vasubandhu）[52]の二兄弟あらわれ、無著は龍樹の八不中道を立脚地とし、さらに一歩を進め、何故に虚妄非有の万有は存在するか、吾人〔われわれ〕

は何に依りて、これを認識することを得るかの問題に入れり。龍樹は重に論理上より、存在の矛盾を説き、「不可得空」に帰せり。しかるに無著はもし虚妄非有のものならば、吾人の存在を認識するは何ぞや、この認識上の問題に進入せり。しかしてさらに他の一方に馬鳴の阿頼耶識説を調合し来り。二家折衷の結果、観念実在論を唱道せり。天親〔世親〕は初め、倶舎論を作り、小乗の立脚地に立ちしも、後、兄無着の誘導により、大乗に帰向し、万法唯識を主張せり。仏滅一千余年、南インド建至国[53]に清弁（Bhāvaviveka）[54]、護法（Dharmapāla）[55]の二論師あらわれ、清弁は龍樹の破有論[56]を祖述し、諸法非実有を論ぜり。掌珍論[57]の頌にいわく。「眞性有爲空　如幻縁生故　無爲無有實　不起似空華」〔「眞性には有爲は空なり、幻の如し、縁生なるが故に。　無爲は實有ること無し、　不起なればなり、空華に似たり。」〕。護法は天親を祖述し、八識より万有顕現の事理を説くこと、すこぶる詳細を尽せり。しかして依他起性について、清弁と火花を散して論争せり。清弁いわく、真勝義の理によれば、依他の法体[58]、畢竟空なりと。護法いわく、依他の上の遍計[59]の妄有は空なれども、そが法体は実有なり。広百論[60]にいわく。「遣彼妄有。故立眞空」〔「彼が妄有を遣るが故に眞空を立つるなり」〕。清弁の門下に智光（Jñānaprabha）[61]あり。仏法の教理を三等に区別し、一切有部の心

境俱有論、唯識の心有境空論、般若の心境俱空論これなり[62]。この中、般若の心境俱空論をもって最も最高完備のものとせり。これと同時代に戒賢（Śīlabhadra）[63]あり、陳那（Dignāga）[64]および護法は万法唯識の原理により、空有（くうう）の中道を仏の真意となし、大いに唱道せり。智光、戒賢両々相下らず。龍虎珠を争うの壮観あり。これを要するに無着、天親は龍樹の「空論」よりさらに一歩を転じ、唯識を唱道せしを以て、その教義「空」「有」の相違あり。故に後世よりこれを観察すれば、龍樹の教系と天親の教系と相樹立せり。龍樹の教系に属するものは、迦那提婆（かなだいば）[65]、羅睺羅（らごら）[66]、青目（しょうもく）[67]、清弁、智光、地婆伽羅（じばから）[68]等あり。天親の教系に属するものは、兄の無着を始めとして堅慧[69]、陳那、安慧[70]、難陀（なんだ）[71]、護法、戒賢等なり。ここにおいてかインド仏教史上における、龍樹の地位の如何なるものなるかを、知ることを得べし。嗚呼、西洋哲学には観念論、実在論の二大潮流あり。支那哲学には人性善悪の大問題あり。インド思想界には「有」「空」の二系あり。世界思想界の大勢を観察する、豈また快ならずや。

9 **四姓**　四種の種性。インドのカースト制度の四つの階級。バラモン（僧・司祭）、クシャトリヤ（王侯・戦士）、ヴァイシャ（商人・農民）、シュードラ（奴隷）のこと。

10 **衆生**　元来は、サンスクリット語 sattva（薩埵）の訳語で、「命ある者」の意。通常は人間を含む動物一般を指すが、仏や菩薩、神話上の異類などを含む場合もある。「心ある者」の意と解して「有情（うじょう）」と訳す場合もある。「生物」や「世間の多くの人々」の意味で「衆生」という言葉が使われることもある。

11 **畢波羅**　菩提樹（インドボダイジュ）のサンスクリット名。

12 **この時三十歳**　ゴータマ・ブッダが成道（じょうどう）した（悟りをひらいた）年齢については、『大智度論』や『普曜経』、『梵網経』などでは三十歳。『増一阿含経』や『中阿含経』、『本行集経』などでは三十五歳としている。また出家した年齢についても、前者では十九歳。後者では二十九歳となっている。しかしながら修行期間については共に六年としていることから、後者の説をとることが多い。

13 **鹿野園**　ゴータマ・ブッダが悟りをひらいてから初めて説法（初転法輪）した場所。鹿野苑ともい

う。

14 **王舎城**　マガダ国の中心都市。

15 **象頭山**　インドにある山。カッサパ三兄弟とその弟子がゴータマ・ブッダに帰依した地。伽耶山ともいう。

16 **拘尸那掲羅**　ゴータマ・ブッダが入滅（死亡）した地。

17 **法輪を転し**　説法すること。転法輪。

18 **四諦八聖道**　仏教における4つの真理と、8つの行動指針。四諦は、苦諦・集諦・滅諦・道諦。八聖道（八正道）は、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定。

19 **迦葉**　釈迦十大弟子の一人。同名の弟子と区別するため、大迦葉、摩訶迦葉（マハーカッサパ）とも称する。

20 **昆波羅山の七葉窟**　第一結集の行われた場所には諸説あり、同じ昆波羅山（ヴァイバーラ山）のヒッパラ窟やソーンバンダル窟とする説、ヴィプラ山の洞窟とする説などがある。『大智度論』は耆闍崛山

（霊鷲山）で行われたとする。

[21] **迦葉は論部に……三蔵を結集せり**　仏教の典籍は、論、律、経に分類され、総称して三蔵という。このうち、論部はブッダの言行録、律部はサンガ（僧団）の戒律、経部は註釈・解釈を集めたものであったが、この分類は次第に拡大され、時代が下ると混交していった。

[22] **羅漢**　阿羅漢の略。悟りをひらいた高僧。

[23] **Sthavira-vāda**　パーリ語では Thera-vāda といい、英語では上座部仏教を Theravada Buddhism という。上座部ではパーリ語仏典が採用されている。

[24] **大鉄囲山**　鉄囲山のさらに外側にあるという鉄の山。仏教の世界観で、須弥山を中心とする九山八海の一番外側にある鉄山を鉄囲山（小鉄囲山）といい、三千大千世界を囲む鉄山を大鉄囲山という。

[25] **八万四千**　仏教において数が多いことを意味する数字として、八万四千が多用される。

[26] **コンスタンチン帝**　コンスタンティヌス1世（Constantinus I　280?～337）。ローマ皇帝で初めてキリスト教を信仰し、以後のキリスト教の進展に多大な影響を与えた。キリスト教各宗派で聖人に列せ

られる。

27 **世友尊者**　ヴァミストラ。一世紀末から二世紀頃のインドの僧。

28 **世出世**　世間（世俗）と出世（世俗を越えた仏法の世界）のこと。

29 **周遍円満**　功徳が十分に満ち足りて広くすみずみまで広がっていること。

30 **無碍自在**　何の障碍もなく、思いのままであること。融通無碍、自由自在。

31 **サーカ種より出でたる、迦尼色迦王**　クシャーナ朝のカニシカ王は、ホータン（Khotan）出身とする説があり、この説に基づき、王統はそれまでと断絶しており、王をサカ族出身とするものか。

32 **馬鳴**　アシュヴァゴーシャ。生没年不詳（一〇〇年頃？）。『ブッダチャリタ』（『仏所行讃』）などを著す。『大乗起信論』の著者とされるが、疑問視されている。

33 **ジャーダラ**　ジャーランダラ。北インドの古国。玄奘が訪れた闍爛達羅（ジャランダラ王国）の都があったとされる場所。現在のジャランダル（Jalandhar）。カニシカ王による結集がこの地で行われたとする説がある。一般にはカシミールで行われたとされるが、第四結集自体の史実性が疑われている。

また本書では国都と記されているが、クシャーナ朝の都はプルシャプラ（ペシャワール）。

34 **脅尊者**　パールシュヴァ。一般的には脇尊者という。二世紀頃の学僧。悟りをひらくまで脇をつけない（横にならない）と誓って修行したことから、こう呼ばれる。「脅」もわきばらの意。馬鳴の師とされる。

35 **毘婆沙論**　阿毘達磨大毘婆沙論。説一切有部の教説をまとめたとされる『発智論』に対する注釈書。カニシカ王が主宰した結集の際の論蔵であるとされるが定かでない。

36 **僧佉**　サーンキヤ学派のこと。

37 **南インド憍薩羅**　ここでのコーサラ国とは、舎衛城のあるコーサラ国ではなく、南コーサラ国。

38 **比丘**　男性の出家修行者。女性の場合は比丘尼という。

39 **摩訶衍**　大乗のこと。摩訶衍も大乗もマハーヤーナ（Mahāyāna）の漢訳。「大きな乗り物」の意。

40 **法界**　意識の対象となるものすべて。因果律に支配される万有の総体。大乗仏教では、世界の真実体、実相（「真如」と同義）として用いられた。

41 **無所得**　あらゆるものにとらわれないこと、執着しないこと。不可得ともいう。

42 **提婆**　アーリヤデーヴァ／聖提婆／聖天／迦那提婆。龍樹の直弟子。一五〇頃～二五〇頃。龍樹の直弟子。『百論』、『広百論本』などを著す。

43 **龍智**　ナーガボーディ（Nāgabodhi）。龍樹の弟子で、真言密教付法の第四祖とされるが、実在性が疑わしく、伝説上の存在か。

44 **阿頼耶識**　唯識派において、六識と末那識に次ぐ第八識。アーラヤ識、蔵識ともいう。第七識までを生み出す心識（心の作用、認識）。

45 **頼耶縁起論**　阿頼耶識に基づいて諸現象が成立するという唯識派の因果関係論。

46 **声聞浅機**　声聞は仏弟子のことであるが、特に大乗仏教から部派仏教徒に対し、自己の救済のみを目指す者として侮蔑的に用いられる。浅機は悟りをひらく能力や資質が劣っていること。

47 **大機利根**　大機は、大乗の教えを実践する資質のこと。利根は、仏道修行の能力や素質がすぐれていることの意。

48 **釈摩訶衍論**　大乗起信論（馬鳴の作とされる）の注釈書。龍樹の作とされるが古来より疑問視されている。

49 **菩提心論**　発菩提心を密教的に基礎づける論書。真言宗では龍樹（龍猛）の作とされ、重要視された。正式には、金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論という。

50 **釈摩訶衍論は……肯綮に当たれり**　第六章で言及される唯識論同学鈔では、南大寺新羅国の僧・珍聰の説として、釈摩訶衍論は、大空山月忠の偽作と伝えている。また宝冊鈔では、唯識論同学鈔と同趣旨の、淡海の説く偽作説と、守護国界章において最澄の説く偽作説を引きつつ、月忠による創作説を伝えている。

51 **無著**　アサンガ／無着／无著。世親の実兄。三一〇頃〜三九〇頃。部派仏教の一つ化地部の僧であったが、弥勒から大乗の教えを学び、転向。唯識派の代表的な論師となった。

52 **世親**　ヴァスバンドゥ／天親。無著の実弟。部派仏教の説一切有部と、同系の経量部に学び、有部の教理体系をまとめた『倶舎論』を著すが、兄に誘われ、大乗唯識派に転向した。

53 **建至国**　三〜九世紀、南インドにあったパッラヴァ朝の首都カーンチープラムのこと。香至国ともいう。中国禅宗の始祖、達磨大師はこの国の第三王子であったという。

54 **清弁**　バーヴァヴィヴェーカ、またはバヴィヤ（Bhavya）。四九〇頃〜五七〇頃。『中観心論』、『般若灯論』、『大乗掌珍論』などを著した。護法との論争は、中観派と唯識派の論争であったが、同じ中観派の仏護（ブッダパーリタ）と論争したことでも知られる。この論争によって、後世チベットでは、中観派に、帰謬論証派と自立論証派が見出され、後者の代表とされた。

55 **護法**　ダルマパーラ。五三〇頃〜五六一頃。『成唯識論』、『大乗広百論釈論』、『成唯識宝生論』などを著した。

56 **龍樹の破有論**　龍樹に『大乗破有論』という著作があるが、ここではその著作のことではなく、龍樹による有論批判のことか？

57 **掌珍論**　『大乗掌珍論』。清弁の著作。玄奘によって漢訳された。

58 **法体**　法（dharma ダルマ）の本体。宇宙万物の実体。法は森羅万象の構成要素のこと。

59 **遍計**　主観的な執着をもって見ること。

60 **広百論**　ここでは聖提婆の『広百論本』に護法が註釈を付した『大乗広百論釈論』のこと。

61 **智光**　ジュニャーナプラバ。無相大乗を掲げ、法相大乗を掲げる戒賢と論争した（とされるが、史実性に乏しく、架空の伝説とみなされている）。ナーランダ僧院で戒賢に師事した玄奘は、智光を戒賢の門弟の上首と伝えている。

62 **仏法の教理を三等に区別し……これなり**　〈心（しん）〉は主観（自我）、〈境（きょう）〉は認識の対象。心境俱有論は〈心〉も〈境〉も実在するとする説。心有境空論は〈心〉は実在するが〈境〉は実在しないとする説。心境俱空論は〈心〉も〈境〉も実在しないとする説。智光と戒賢は、論争において双方が三時教判（三段階に及ぶ教相判釈）を立てたが、智光は、初時を心境俱有、第二時を心有境空、第三時を心境俱空とした。これに対し、戒賢は、第二時を心境俱空、第三時を心有境空とした。

63 **戒賢**　シーラバドラ。生没年不詳。六世紀末の仏僧。護法の弟子。玄奘の師。長くナーランダ僧院の学頭をつとめる。

64 **陳那**　ディグナーガ／域龍。四八〇頃〜五四〇頃。仏教論理学者。

65 **迦那提婆**　アーリアデーヴァ／聖提婆の別名。片眼であったことから迦那提婆（Kāṇadeva）とも呼ばれる。迦那（Kāṇa）は片眼の意。

66 **羅睺羅**　ラーフラバドラ（Rāhulabhadra）。聖提婆の弟子。

67 **青目**　ピンガラ（Piṅgala）。龍樹の偈文（根本中頌）に注釈を加え、『中論』を完成させた人物。

68 **地婆伽羅**　ディヴァーカラ（Divākara）／地婆訶羅／日照。六一三〜六八七。インド出身の訳経僧。法蔵（中国唐代華厳宗の僧）に、智光・戒賢論争を伝え、法蔵はこの論争を『十二門論宗致義記』などに著した。ただこの論争は架空の伝説とされ、法蔵の著作が初出であり、インドの文献には見られない。

69 **堅慧**　『入大乗論』、『大乗法界無差別論』、『究竟一乗宝性論』の著者とされる人物。安慧＝スティラマティと同一視される場合もあるが、同名の別人とする説もあり、定説を見ない。

70 **安慧**　スティラマティ（Sthiramati）。五一〇頃〜五七〇頃。『大乗阿毘達磨集論』、『大乗廣五蘊論』、『大乗中観釈論』の著者とされる人物。

71 **難陀**　護法、安慧らと並んで、唯識十大論師の一人とされる人物。種子（しゅうじ）新薫説を唱えた。

第二章　「空」「有」潮流の根本的差異

実在論と観念論

二千余年前、希臘（ギリシャ）半島に哲学の曙光を発し、月に明かりを加え、年に輝きを増し、今や独英仏において近世哲学の燦爛（さんらん）たる光明を煌々たらしむるに至れり。この間の思想界の大勢を観察すれば、実在論と観念論の二大思潮、一起一仆、一盛一衰、粗なるものは密となり、欠けたるものは補われ、転々循環、以て今日に至りしと同じく、インドの思想界、殊に思想の変遷転移は実に「有」「空」二大思潮の、一起一仆、一消一長に外ならずして、その状、あたかも隆々岸頭に寄せくる海波の、離れては合し、合しては離れ、以て進行し来るに似たるものあり。

「有」「空」の二思想

インド仏教「有」「空」二思潮の進行は、一千余年の継続をなせり。しかしてなお今日において、錫蘭（セイロン）に暹羅（シャム）に日本に進行しつつあり。吾人は龍樹の「空」論を研究するにあたり、ま

ず二潮流の根本立脚地の差異を一瞥するの要あり、この二潮流の根本的立脚地を知らざれば、龍樹の「空」論を明白にすること能わざるを信ずるを以てなり。水の流るるは水源あればなり。火の燃ゆるは薪材あればなり。「空」論の起こり、「有」論の起こるは、その起こるべき内的外的の事情と理由あるを以てなり。

「空」思想の代表

まず「空」の思潮を代表するものは、般若部の経典たる、放光般若波羅蜜経〔放光般若経〕、摩訶般若波羅蜜経〔大品般若経〕、光讃般若波羅蜜経〔光讃経〕、道行般若波羅蜜経〔道行般若経〕、小品般若波羅蜜経〔摩訶般若波羅蜜経〕、摩訶般若波羅蜜鈔経〔摩訶般若鈔経〕、大明度無極経〔大明度経〕、勝天王般若波羅蜜経、金剛能断般若波羅蜜経〔金剛般若波羅蜜経〕、佛説濡首菩薩無上清浄分衛経、仁王護国般若波羅蜜多経、實相般若波羅蜜経、摩訶般若波羅蜜大明呪経、般若波羅蜜多心経、文殊師利所説摩訶般若波羅蜜経、文殊師利所説般若波羅蜜経のごとき、大衆部中、一説部、説仮部のごとき、龍樹、提婆、羅睺羅、青目、清弁、智光のごとき、訶梨跋摩[72]（かりばつま）のごとき、皆これ「空」思潮に属するものなり。

「有」思想の代表

「有」の思潮を代表するものは、中阿含経、増一阿含経、長阿含経、雑阿含経、解深密経、楞伽経、勝鬘経等のごとき、上座部諸派のごとき、馬鳴、無著、天親、堅慧、護法、難陀、安慧、陳那、戒賢等のごときこれなり。この中、大乗あり、小乗あり、大乗中にも種々、義に異にし、小乗中にも各々、説を別にし、精粗浅深ありて、一概にこれを設定し去るを得ざれども、「空」「有」両系中より、そが共通の立脚点をとり、二者を比較対照せんと欲するなり。

「空」「有」二思潮の比較

一、仏教教義を大判することは、実相論的説明と縁起論的説明との二大部面あり。実相論的説明は、宇宙万有を空間的に観察し、ただちにその真実体を説明せんとするものなり。縁起論的説明とは、宇宙万有を時間的に観察し、そが開展発生を説明せんとするものなり。しかれども尅実(こくじつ)してこれを論ずるときは、縁起は実相の一面というべく、実相の外

に縁起を除くは不合理なり。ここに二者を統合して実相即縁起、縁起即実相というを妥当なりとす。二者の間、這般（しゃはん）の面影隠顕せざるにあらざるも、実相論を主張するものは、法界（ほっかい）の真実体そのものに重きをおき、縁起のごときは如幻虚仮（にょげんこけ）、水中の月、鏡中の像、一顧の価値だもなしとする傾向あり。縁起論を主張するものは、ひたすら縁起の相状を論じ、家屋を建築するごとく、法界万有を建築的に論証せんとするなり。実相論を主張するものは、そが必然の勢いとして、論旨否定的なり。縁起論を主張するものは、論旨多く肯定的なり。ここにおいてか、二者の間、衝突争論起らざるを得ず。「空」論を主張する一派は、皆、実相論なり。「有」論を主張する一派は、皆、縁起論なり。この二派はすでにその方面において異なれり。本来は調和し得べき性質なるにもかかわらず、一方に走り、ややもすれば攻撃弁難するに至るなり。

二、成仏についてまた二種の思想あり。一つは一性皆成仏を主張するものにして、王公も賤民も、男子も女人も、智者も愚者も、善人も悪人も、その根底において、皆、仏性を有するものなれば、修行工夫によりて成仏し得べしと主張せり。この派の思想の根拠は、一切衆生に皆、仏性あり、そが根底は同一なりというにあり。一つは種性（しゅしょう）不同を主張

するものにして、本来衆生に先天的種性あれば、あるものは声聞となるべきも、その他に成るを得ず。あるものは縁覚[73]になるべきも、その他に成るを得ず。あるものは菩薩になるべきも、その他になるを得ず。あるものは仏陀となるべく、あるものは不定[74]となるべく、あるものは常に迷界に彷徨すべしという。かくのごとく種性を区別して、ことごとく成仏することを許さず。けだしこの派の理由は、社会人間の状態を観察するに、たとえ同一の境遇におき、同一の教育を施し、同一の態度をとらしむるも、あるものは賢者となり、あるものは愚者となり、あるものは剛毅勇壮に、あるものは卑屈柔弱に、種々に差別して、顕現し来るをみれば、その種性に不同あるや知るべきのみ。もし種性にして果して同一ならば、かくのごとき差別をすべき理由なきなり。かくのごとき、実際の観察上より決帰して、種性不同説を唱道し、一性成仏説を許さざるものなり。「空」論の一派はみな一性成仏説なり。「有」の一派は、無著、天親以後、種性区別説を唱道せり。小乗において大衆部は性得仏性を主張し、上座部は修得仏性を主張せり。これ一変して後世、一性説と多性説[75]に変化せりというべし。

三、「空」系の一派も「有」「空」を論じ、「有」系の一派も「有」「空」を論ずれども、

「空」系の人の「有」「空」を論ずるや、「空」を以て真諦（しんたい）とし実義とし、「有」を以て俗諦（ぞくたい）とし、仮設（けせつ）とするなり。「有」系の人の「有」「空」を論ずるや、「有」を以て真諦とし実義とし、「空」を以て俗諦とし虚計とせり。もし局外に立ちて公平に二派の所論を観察すれば、「空」派の「空」なるものも、「有」派の「有」なるものも、根本的に峻別せるものにあらずして、多少観察方面の差異と説明の差異とに過ぎざるなり。古来「有」「空」の争論を評して、相破相成と伝えるは旨言というべし。[76]

上来陳述せるごとく、「有」「空」二思潮において、重要の差異の存ずるをみる。しかしながら公平にその所説を観察すれば、「有」といえばとて、単有にあらずして、「空」の原理の横たわるをみ、「空」といえばとて、単空にあらずして「有」の原理の潜めるをみる。故にもし精密に論評するときは、「有」「空」二派所説互いに錯綜交入して、概括して論断しやすからざるなり。

72 **訶梨跋摩**　ハリヴァルマン（Harivarman）／獅子鎧／師子鎧。4世紀頃のインドの僧。『成実論』を著した。

73 **縁覚**　師を持たず、独自に悟りに至る者のことで、自己の救済のみに専心し、他者救済を目指さない者のこと。独覚、辟支仏ともいう。

74 **不定**　不定種性／不定性。三乗（声聞、菩薩、縁覚）の種性のいずれとなるか確定しないものを不定種性という。これらに加えて、悟りをひらく能力のない者を無性といい、合わせて五種性という。

75 **一性説と多性説**　一乗一性説と三乗五性説（五姓各別説）のことか？

76 **古来「有」「空」の争論を評して……旨言というべし**　「相破相成」は互いを論破することが互いを成立させるということ。たとえば、法蔵は華厳五教章（華厳一乗教分記）において、清弁と護法の論争を「相破して返りて相成す」と評している。「色卽ち是れ空なるを以て、清辨の義立す。空卽ち是れ色なれば、護法の義存す。二義鎔融し擧體全攝す、若し後代の論師の二理を以て交徹し、全体相奪すること無くんば、甚深縁起依他性の法を、顕すことを得るに由無けん、是故に相破して返りて相成す」（『国訳大蔵経：昭和新纂 宗典部 第17巻』p.41）

第三章　龍樹の性行

龍樹は仏滅後七百年、西洋紀元二世紀の頃、南インド憍薩羅（Kosala）７７の婆羅門の家に生まる。憍薩羅は四境めぐらしに連峰を以てし、草木繁茂し河川ここに貫流し土地豊饒なる一国なり。彼の功績は、ひとり仏教史上、異釈煥発するのみならず、当時インド思想界における大統合者大思索なることを忘却すべからざるなり。

龍樹の第一期

龍樹は天資英敏聡明、少年早くすでに一を聞いて十を知り、表を見て裏に徹し、想像力豊かに、夏雲の湧き出ずるかごとき詩的性能と、絲分縷析、脈絡を洞察して骨髄に徹する、敏活なる理性作用を有せり。世に神童と称するものは、かくのごとき性質を有するものをいう。彼は神童中の一人たりしなり。かくのごとき性質は決して十中七八の地位に満足するものにあらず。尋常一様の事に満足するものにあらず。その極端に達し、その究竟点に到着せざれば止まざるものなり。これがため往々非常の弊害に墜ることあり。あるは不健全なる厭世観

に堕し、あるは肉欲の奴隷となり、あるは名聞に昏睡し、あるは高慢に墜落することあり。世に神童と称せられながら、後年全く聞きゆるなきに至るは、一つは才を負うて勤勉を疎外にすることなきにあらずといえども、またかかる邪路に彷徨して、正路に帰ること能わざるを以てなり。龍樹は幼年にして、四圍陀（ヴェーダ）[78]、天文地理、図緯秘讖（とういひしん）〔占術〕、および諸道術、ことごとくこれを了悟し、声名つとに諸国に籍々（せきせき）たり。しかれども彼はこれを以て満足する能わず。さらに進みて人間の最大楽事を求めんと欲せり。人間の最大楽事とは何ぞや。彼はこれを解釈するに、名誉を以てせず、権勢を以てせず、道徳を以てせず、智識を以てせず、最も下等なる肉欲を以てせり。嗚呼、不出世の天才、逆に肉欲の一大深淵に堕落するに至りしか。彼、親友三名と相計り、密かに王宮に忍び、宮女を凌辱するを以て楽とせしというもの、まさに当時の状態を暴露するものにあらずや。吾人は、幼年より肉欲に堕落するまでを、彼の第一期とするものなり。

龍樹の第二期

しかれども記せよ、龍樹は天才なることを。悪に強きものは善にも強し。いったん機会に

遭遇し、翻然その過失をさとるや、九地に墮落せし人は、奮然立ちて九天にのぼれり。千仞（せんじん）の渓谷に蹴落されたる獅子は、一躍してそが山頂に達せり。見よ、彼らの行為が王の激怒にふれ、三名の友人は無残の刃の下にその一命を損じ、自己のみ九死に一生を得、辛うじて虎口を逃るるを得るや、「欲為苦本」〔欲は苦しみのもとである〕の真理を、中心〔胸中〕深く感ずるところあり。これより出家となり、仏教を学習し、出家後九十日にして小乗三蔵をよみつくし、それより北方、ヒマラヤ山（Himalaya）に入り、一比丘より摩訶衍の経典をさずかり、さらに諸国を周遊して種々の学術技芸をさぐりたり。しかも一つとして十分心を満足せしむるものを見ず。彼は今当時インドに行われたる思想に精通せり。しかもこれを以て満足するを得ず。人もしかくのごとき、境遇に立たば果（は）た如何すべきか。さらに向上の大道に向かいて一歩を転ずるにあらざれば、あるいは懐疑に墜り、あるいは自暴自棄に墜り、あるいは高慢に墜らん。これまた実に苦心惨憺、永劫運命のかかる大機たらざるを得ざるなり。一日（いちじつ）外道〔異教徒〕の弟子、龍樹にいいていわく。「師は一切智人〔すべてを知る者〕なり。しかるに今、仏弟子となれり。不完全なる道法をうけながら、これを不完全と思わずや。この一事足らざるも一切智人にあらざるなり」と。彼この言に服し、心に思いらく、仏教、妙といえども、未だ

尽くさざるところあり。我これを補い、別に一新義を建立せんと。静処にありて深く思惟に沈めり。出家以来、一新義を建立せんとするまでを、龍樹の懐疑求道（ぐどう）の第二期とす。

龍樹の第三期

第三期の始まりに関しては、吾人、龍樹の悟道を以てせんと欲す。しかれどもその伝うるところや神怪にして、教育ある人士の首肯する能わざるところたらん。大龍菩薩（龍神）、龍樹の邪見に沈淪（ちんりん）するをあはれみ、龍宮に引率し、七宝の華函をひらき、諸（もろもろ）の深奥なる大乗経典を授け、彼これを受読して心智大いに開き、大道に到達したる故、これを本所に送還せりと。人はこれを聞いて一つの怪談となさん。しかれども吾人はただちにこれを拒否するを欲せず。一種の意義を有することを信ず。誠に古来聖賢偉人に関する歴史上の伝をきけ。希臘（ギリシャ）のソクラテスは常にデーモン〔ダイモン〕の命令をききしといい、支那の王陽明は、胸に天の声をきくといい、亜剌比亜（アラビア）のマホメット〔ムハンマド〕は天使ガブリエルによりて道を得たりといい、インドの无著〔無著〕は毎夜、定（じょう）に入り、弥勒より直接に大乗教を聴きしをいい、支那の善導は毎夜一僧の指授によりて、観経四帖疏〔観無量寿経疏〕を作るというもの、これらの

偉人聖賢、豈虚偽によりて人を瞞着せんとするものならんや。中心誠にしかくこれを信ぜり。誠に思い沈思冥想、苦心惨憺の極み、一朝忽然、心眼朗然得るところありとせよ、その何処より来りしやを知るべからず。その如何かして来たりしやを知るべからず。何が故、そのしかりしやを知るべからず。神を通ずるもの、神の啓示によるとし、仏を奉ずるものは、仏の顕示によるとし、天使といい、龍といい、皆この一大深感の影ならざるなし。後来、世に伝うるに及び、弟子および信者のため、拡大され、彩色され、神秘化され、一種奇幻の形状を有するに至りしといえども、その本源に遡れば、実にかくのごときものあり。吾人は龍樹の龍宮界に入りて、大乗の深義を会得せりというもの、この心的経遇の状態にあらざるかと疑う。英国のカーライル、マホメットを論じていわく。

A false man found a religion? Why, a false man cannot build a brick house! If he do not know and follow truly the properties of mortar, burnt clay and what else be works in, it is no house that he makes, but a rubbish-heap. It will not stand for twelve centuries, to lodge a hundred and eighty millions; it will fall straightway. A man must conform himself to Nature's laws, *be*

verily in communion with Nature and the truth of things, or Nature will answer him, No, not at all!

虚偽の人間が宗教を起したとでも言うのであろうか。だって、まごころのない人間では煉瓦の家一軒建てることもむずかしいではないか！　もしもその人が漆喰、焼粘土その他仕事に必要なものの特質を本当に知り、それに従うのでなければ、その人の建てるのは家ではなくて、がらくたの山にすぎないのだ。十二世紀間も立っていて、一億八千万の人間を宿すわけがないのだ。そんなものならたちまち崩れるはずだ。（「英雄と英雄崇拝」『カーライル選集2』入江勇起男訳 pp.65-66）

しかり偽人は決して宗教を造る能わず。長年歳の間、多数人類を支配する人、必ず自然の大法と一致し、自然と真理を洞了する人ならざるべからざるなり。古来、偉人豪傑と称するものの言行中、神怪妄誕に類するものありといえども、当時、理科学は幼稚にして、自己の思想感情を明白に吐露するの道を教えず、自己の思想するところ、自己の感ずるところ、これを発表するにあたり、止むなく神話の形状たらざるを得ざるなり。されば吾人たるもの、そが神話に含める一種の意義を看破するの必要あり。この見地に立ちて、、徐(おもむ)ろに奇怪なる

龍樹の伝説を研究すべし。

龍宮界より帰りし以後の龍樹は、求道の人にあらずして伝道の人なり。山に入る人にあらずして、山を出るの人なり。聖壇に向かうの人にあらずして、聖壇を下る人なり。自得のための苦悶は去りて、化他のための大責任は来れり。彼は自己の主義を明白にせんがため、数百部の著述を出せり。現に日本の蔵中に存せるものにして、智度論[79]、中論[80]、十二門論、十住毘婆沙論、十八空論等、三十余部あり[81]。彼は実に多角多面なること、アリストテレスのごとく、カントのごとし。しかれどもその所論、皆「不可得空論」の立脚地より、これを解釈せり。以て当時における一時代の思潮を形成せり。彼はただに思想界に活動せるのみならず、また実際上において活動せり。勧誡王頌（Suhrillekha）[82]を読めば、龍樹が南インド国王乗土に親密の交際を結び、諄々これを誘導せしを知るを得べく、同憍薩羅国引正王は深く龍樹に帰依せり[83]。弟子には有名なる迦那提婆（Kāṇadeva）のごとき、龍智（Nāgabodhi）のごときあり。死後南天の諸国、塔廟を作り、これを尊崇せるを見ても、如何にその勢力の大いにその感化の深かかりしかを知ることを得べし。龍樹の大悟より活動時代までを三期とするなり。これを要するに、龍樹一生涯の過程は、坦々たる如髪大道を、直向

進前するものにあらずして、捷敏聡明、多感多血の性、時に極端に走り、そのようやく正路に遠かるを自覚するや、さらに方向を転じて直進し、ついに光明安立の大道に達し、以来利他教化を以て、晩年を迎うるに至れり。彼の一生涯は多面なり。故に雑多の位置の人、種々の境遇の人、様々の性情の人に、教ゆるところ多し。その一生涯の経遇は、アウグスチヌース（Augustinus）〔アウグスティヌス〕に比すべきか。氏は紀元三百五十四年にヌミデア〔ヌミディア〕のダガステ〔タガステ Thagaste〕に生まれ、大いに羅馬教（ローマ）〔ローマ・カトリック教会〕のために心力を傾注し、ただに理論上の基礎を与えしのみならず、また実際上、大いに尽くすところあり。青年の時カーセーヂ〔カルタゴ Carthage〕留学の際、羅馬教に熱心なる母の教訓に背き、マニ教を信じ、かつ放蕩淫逸の境に堕落せり。三百八十三年、羅馬に行きし頃は、羅馬教を以て不合理となし、一種の疑惑を懐抱し、かえって新プラトン学派の懐疑論を信用せり。その後大疾病にかかり、困難をきわむ。疾病全快して後、耶蘇教の大説教家アンブロジユス〔アンブロシウス〕に交際を結び、漸々（ぜんぜん）その人の感化をうく。されど未だ踟躇（ちちょ）徘徊の間にありしが、いったん良心の苦悶に堪えかね、前非を後悔し、流涕（りゅうてい）、天に向いて己が従前の過ちを後悔せり。その時偶然、汝、これを読めよと、命令するものあるがごとく、これを感ぜり。眼を開いて

これをみるに、一物を見ず。これを一友人にかたる。友人ただちに新約全書〔新約聖書〕を繙き、使徒パウロの書翰〔パウロ書簡〕を示せり。これを一読するにあたかも氏の所感と合せしかば、氏はここに精神を決定し、同教のため、鋭意尽力するに至りたり。時に年六十二、後、氏は同教のため理論上実際上、大いに尽力するに至れり。その生涯、実に龍樹に似たらずや。

---

77 **南インド憍薩羅**　龍樹の出身地は、舎衛城のある北インドのコーサラ国ではなく、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』（『慈恩伝』）が伝える南憍薩羅国（Daksina Kosala）と推定される。

78 **四圍陀**　バラモン教の4つの経典。リグヴェーダ、サーマヴェーダ、ヤジュルヴェーダ、アタルヴァヴェーダのこと。

79 **智度論**　大智度論ともいう。大品般若経の注釈書で、鳩摩羅什によって漢訳された（サンスクリット原典は残っていない）。序品のみ完訳で、以下は抄訳であるが、百巻に及ぶ大著である。広範な主題を扱っていることから、大乗仏教の百科全書とも評される。翻訳時の加筆編集が疑われ、龍樹の真作であ

るかについては議論があるものの、龍樹研究において重要視される。

80 **中論**　龍樹の主著。「空」思想の哲理を構築した仏教教理学における最重要な理論書。詩頌とその注釈とからなり、特に詩頌だけを指して『根本中頌』と呼ぶ。より正確にいえば、『中論』とは、青目注の漢訳本（鳩摩羅什訳）のことであるが、一般的には『根本中頌』のみを指しても『中論』と称する。月称（チャンドラキールティ）による注釈書『プラサンナパダー』（明句論）が『根本中頌』のサンスクリット語全文を伝える。

81 **三十余部あり**　今日、龍樹の真作と考えられているものとしては、『中論』、『六十頌如理論』、『空七十論』、『廻諍論』、『ヴァイダルヤ論』の5つ（これらを「五部正理論」という）に加え、『宝行王正論』、『勧誡王頌』、『四讃歌』、『大乗破有論』、『菩提資糧論』、『因縁心論』がある。この他、真偽が未解決であるが、龍樹の思想を研究する上で重要とされるものとして、『十二門論』、『大乗二十頌論』、『大智度論』、『十住毘婆沙論』がある。本文に挙げられている『十八空論』は、唯識思想が色濃く、偽作の可能性が高いとされる。

82 **勧誡王頌**　龍樹がサータヴァーハナ朝の王に宛てた教訓的な手紙で、『友人への手紙』ともいう。

チベット訳と漢訳三本が残っており、漢訳では『龍樹菩薩勧誡王頌』（義浄訳）がよく知られる。

83 **龍樹が南インド国王乗土に……深く龍樹に帰依せり**　龍樹はサータヴァーハナ朝の一国王と親交があったが、その王がこの王朝の誰に当たるのかは定かではない。チベット訳では bde spyod とし、義浄訳『龍樹菩薩勧誡王頌』では、「乗土」（宋本では乗士）と記しているが、「娑多婆漢那」（サータヴァーハナ）と同一視しており、乗土は王の固有名ではなく、王朝名ないし国名であると推察されている。『大唐西域記』において玄奘は、龍樹に帰依し伽藍を寄進した王として、引正（王）という名前をあげているが、「娑多婆訶」と同一視しており、これもやはり王の固有名ではなく、サータヴァーハナの漢語訳と考えられている。乗土王と引正王は同一人物とされることが多いが、本書では別人物説を採っているようである。なお本文中「同憍薩羅国引正王」とあるのは誤りと思われる。

第四章　無宇宙論の基礎

哲学と宗教の融合

インドにおける馬鳴、龍樹、天親等の大乗仏教の特色は、その智力的なるにあり。故にある方面よりいえば、哲学の学説に接するの観あり。しかしこれを我が身に実行して、安立の基礎を得、また世界の衆生をしてこの域に達せしめんことを以て、自己の任務とするに至っては、宗教的性質を有せりというべし。ただに知識欲の満足を目的とする、形而上学にはあらざるなり。

人世観即世界観

その教義たる人世観即世界観にして、人間解脱の方面より宇宙を解釈せるものなり。一応の見解によれば、人世観世界観二個に分判するは、正当なりといえども、もし精密にこれを論ずるときは、確定したる世界観を基礎として、その上に人世観を建築せざるべからざるを以て、人世観世界観は相一致せざるべからざるものなり。しかして世界観を構成するは、畢

竟人世観に資するものなるを以て、インド大乗仏教家の人世観即世界観の教義は大体において、吾人その当を得たるを信ずるものなり。

「無宇宙論」の論理的過程

龍樹の教義は、「空不可得論」にあり。現在の宇宙の現象を以て、迷妄とし、如幻とし、非有虚空とするなり。吾人はこの点より龍樹の教義を指して無宇宙論という。それひとつの断案を得んには、必ずや断案に到達するまでの、論理的過程なからざるべからず。されば「空」論を主張し「無宇宙論」を主張する、また必ずそが過程なからざるを得ざるなり。龍樹の無宇宙論を唱道するや、論理の法則により、世界の事物および関係の撞着矛盾なることをあらわし、これによりて虚妄非有なることを証明せり。乞う、詳らかにこれを論究せん。そもこの宇宙万有の実在なりや、果た迷妄なるやは、論理の法則に訴えて、これを判定せざるべからず。もし実在なりせば、論理の法則に適合し、もし迷妄夢幻のごときものなりせば、必ずや論理上矛盾撞着を来さざるべからず。しかるに宇宙の事々物々について、これを観察するも、またその相互の関係について、これを観察するも、徹頭徹尾、矛盾のみ撞着のみ。これ

実に無宇宙論を唱道する根源なり。しからばすなわち論理の法則を以て「有」なりと予想するのにあらずや。

疑問

人あるいはいわん。龍樹は論理の法則により、事物およびその関係の矛盾衝突を説明するも、これただ一応のことのみ、もし尅実して論ずるときは、論理の法則それ自身も一定不変のものにあらず。必ずや矛盾撞着に終らん。故に龍樹の真意は、畢竟無所得にありと。吾人これに答ていわん。それあるいはしからん。しかりといえども、もしそが根底に確実なるある認識を立つるにあらざれば、「空不可得」の議論も、また不成立の運命を免れず。かくのごときは極端なる懐疑論、暗黒なる破壊主義にして、龍樹自身の議論も成立し能わざるなり。かくのごとくにして、豈宇宙の真相を洞察し、結局の安心を得ることを得べけんや。しかるに龍樹の本意は、万有法界の真相を洞覚し、吾人の安立を決定(けつじょう)せんとするにあり。故にその根底においてその中心においてある不動の認識を許さざるべからず。ただその認識の結果たる法界の真相は、言語に発表すること難(かた)く、思想に構成すること難(かた)みすとするにあり。

四個の原則

かくのごとくなれば龍樹の無宇宙論の根底は、左の条件を想像せざるべからざるなり。

（一）法界の真実体は言語道断、心行処滅（しんぎょうしょめつ）の或物なり。

（二）論理の法則は真実なり。

（三）論理の法則により、修行直観に基づき、宇宙の真実体を洞覚することを得べし。

（四）宇宙の真実体を言語また思想に発表せんと欲するときは、ただ否定的の一方面あるのみ。

以上の四項目は、龍樹議論の根底として必ず預想せざるべからざるものたり。彼は中論、十二門論において、種々の事物および関係をあげ、その矛盾を説明せり。智度論所々に否定的方面の解釈を示せり。しかりしこうして「空」論、「無宇宙論」の論理的過程として、最も必要なるものは、万法万有は因縁所生なりということこれなり。小乗の教義にありては、万

法は因縁所生なるが故、無常なり、苦なり、空なり、無我なりと唱い、人空法有論[84]を主張するなり。諸法因縁生の五字、誠に着目すべき重要の事件たり。龍樹にありてはこの五字、無宇宙論の大眼目となるなり。見よ、中論には劈頭第一、観因縁品（かんいんねんぽん）をかかげ、十二門論、また同じく観因縁門をかかぐるにあらずや。諸法因縁生なるが故、自性なし。無自性の空なり。しかしてさらに歩武を進め、因縁それ自身も不成立なることを主張せり。かくのごとくにして万有の真相は、有無・一異・生滅・断常・去来をはなれ、無念無言説の「不可得空」と決せり。乞う、これより少しく論理的過程を験査〔検査〕せんかな。

諸法は如何にして生ずるか

（い）　諸法は如何して生ずるか。諸法の発生を検査するに、自体より生ずるか、他体より生ずるか、自体他体相依りて生ずるか、無原因にして生ずるかの、四者その一つならざるべからず。しかるに四者の中、自体にして、もしすでに存せば、さらに自体を生ずると理由なし。また他体より生ずることなし。何となれば、他体は自体に対して存立するものなり。もし自体にして存立せざる以上は、他体なるものまた決して存立すべからず。不存立のものよ

り諸法発生すというべからざるなり。すでに諸法自体よりも生ぜず、他体よりも生せずとすれば、自体他体相依りて生ずというを得ず。もしすでに諸法の自体他体を預想するときは、さらに諸法発生を説くの必要なきを以てなり。さりとて諸法は無原因に依りて生ずというべからず。何となれば、無より有を生ずべからざればなり。これを要するに諸法発生ということは、論理上不可有のことなりと。

諸法に自性なし

（ろ）　諸法に自性なし。吾人一般の見るところによれば、諸法の存在は因縁の和合による。もし因縁和合によりて、諸法存在するものとなれば、諸法に自性なし。何となれば、ラインの河、美なりといえども、永劫その流れを保つにあらず。星移り、物かわり、いつか水涸れて、河底に野草の生ずるときあらん。富士の高根は崇高なりといえども、業風一度吹きすさまば、土石くだけて灰塵となり、天上の雲もその宿を失わん。嗚呼、山河は永久山河なるにあらず。いったん因縁離散すれば、山河消滅に帰す。これ、豈一定の自性なきことを証するものにあらずや。草木しかり、動物しかり、日月しかり、河海しかり、その他事々物々皆し

からざるはなし。これを要するに、星といい、花といい、山といい、水といい、諸法万有は、因縁和合上の仮名仮性にして、決して永久不変の自性にあらず。論者あるいはいわん。山河草木は因縁所生なれば、自性なしという可なるべきも、因といわれ、縁といわる極微のごときは、一定の自性あるにあらずやと。答えていわく、否、その極微なるものも、時間、空間、運動、その他種々雑多の因縁関係によりて、存在するものにして、決して一定不変の自性を認むる能わず。如何ほど分拆（ぶんたく）し来るも、因縁関係をはなれたる、一定不変の自性をみとむる能わざるなり。ロッチェ[85]いわく、To be is to be related（存在するということは関係するということである）[86]と。龍樹、諸法存在は因縁和合なりという。またこの旨に外ならず。かくのごとく諸法は因縁関係の上に存在して、一定不変の自性なし。一定の自性なきが故、一定の諸法なし。

結果は因縁の中にあらず

（は）　結果は因縁の内にあらず。結果は因縁より生ずという。しかるに因縁は結果に対望する言なり。結果の生せざる以前は、因縁ということを得ず。結果の生ずる以上は、結果に

して因縁にあらず。しからばすなわち結果は因縁より生ずというは、無意義の言たり。さらに一歩を進めて、これを考うるに、結果は因縁の中にありとするか、なしとするか。もしすでに有りとすれば、因縁に依りて、結果を生ずというべからず。何となれば結果、すでに本有なればなり。もしなしとすれば、無より有を生ずべからず。何に依りてか、結果は因縁に依りて、存在すということを得んや。これに依りてこれをいえば、因縁の中に結果あるにあらず。因縁と結果は無関係なり。因縁と結果、無関係なれば、因縁なく結果なし。ここにおいてか宇宙万有存在せざるなり。

四縁あることなし

（に）　四縁あることなし。小乗仏教にては、宇宙万法の生ずるは、四縁によるととく。四縁とは、一に因縁、二に次第縁、三に所縁縁、四に増上縁これなり。龍樹はひとつひとつこの四縁を破却す。初めに因縁というは、一般に原因を指して因縁という。前にすでに陳述せるごとく、原因結果は対望上の言なり。しかるに結果は原因の中に存するにあらず。また原因の外にあらず。原因と結果は全然無関係なり。全然無関係なれば、対望上の言をなすを得

ず。故に原因結果共に破壊し了せり。次に次第縁とは、吾人〔われわれ〕の精神作用において、前の精神作用滅するは、後に生起する精神作用の縁となるなり。これを次第縁という。破していわく。現在の精神作用活動して、未来の精神作用起こらざるとき、未来の精神作用無なり。有、豈無のための縁たらんや。もし未来の精神作用、現起（げんき）するときは、すでに次第縁の必要なし。また現在法は有為なり。有為法87なるが故、瞬間も止住（しじゅう）すること能わず。止住なければ次第縁たる能わざるなり。故にいずれの点よりいうも、次第縁なし。次に所縁縁とは、能縁心〔主観〕のため、所縁〔客観〕の境（きょう）〔認識の対象〕となるものをいう。故に有為法はしばらくも止住せず。真実の境界は無相空寂（くうじゃく）なり。故に所縁の境なし。故に所縁縁もなきなり。次に増上縁とは、原因を補助して結果を生ずるものをいう。原因は結果を生ずるに親しく、増上は結果を生ずるに疎なるもの。例せば、麦種は原因にして、雨露水土等は増上縁なり。しかるに前にすでに陳述せるごとく、原因存在せざれば、また増上縁も存ぜず、これを要するに四縁畢竟無なれば、万法無なり。万法無なれば宇宙無なり。しかるに今日吾人の宇宙万有の実在を目撃するは、眼病者の空花をみるがごとく、業感上の夢幻のみと。以上は諸法因縁生を基礎として、これを論理に照し、ついに諸法を非有虚妄に決帰せり。かくのごとく中論

の二十七品、十二門論の十二門、皆ことごとく宇宙の事物および関係の矛盾撞着を説明し、そが「不可得空」「無宇宙」を成立するなり。

---

[84] **人空法有論**　人（＝自我）には実体がない（＝空である）が、五蘊などの法（構成要素）は実在するという部派仏教の考え。これに対し、大乗仏教では、どちらにも実体がないとする人法二空論の立場をとる。

[85] **ロッチェ**　ヘルマン・ロッツェ（Rudolph Hermann Lotze, 1817-1881）。ドイツ観念論の哲学者。著者の師・清沢満之はロッツェの『形而上学』（Metaphysik）を、英訳版を元に、講義していた。

[86] **To be is to be related**　ロッツェがよく用いた表現。例えば、『形而上学概論』（横島壮周訳、現代評論社、一九四八）では、「云ひ換へれば事物の『存在』と云ふことは『交互関係に立つてゐる』と云ふことと同じ意味なのである」（p.29）。「我々は前に事物の存在ということは『関係に立つこと』であると云つた」（p.32）という表現が見られる。

[87] **有為法**　因果関係によって形作られたもの。関係論的に構成され、生成消滅するもの。

この続きは製品版でお楽しみください。

著者略歴

楠龍造（くすのき・りゅうぞう／和田龍造／和田鷗浦）

一八七四年（明治七年）、秋田県男鹿市の休宝寺に生まれる。浄土真宗大谷派の擬講。清沢満之（明治期の宗教哲学者）に師事。清沢の真宗大学（大谷大学の前身）学監（学長）就任に際し、予科講師に招かれ、私塾・浩々洞で、暁烏敏など、他の門弟らとともに共同生活を営む。一九〇四年に同大教授となる。雑誌『無尽灯』、『精神界』の編集に携わり、寄稿者としても活躍。一九〇五年、和田家の養子となり、秋田県能代市の西光寺に入寺する。一九三三年（昭和八年）没。主な著作に『宗教管見』（明治三十四）、『他力宗教論』（明治三十七）、『原人論講録』（大正九）などがある。

龍樹の仏教観

著者
楠龍造
2023年5月27日　初版発行
Ver. 1.00

発行所　八不
発行者　花村徳之
Web site: https://www.hapbooks.com/
E-mail: hap2022info@gmail.com
Twitter: https://twitter.com/hap2022info

これはサンプル版です。
是非とも製品版をお買い求めください。